

## 曾根、大塩附近のノジギクを探るの記

江越千代子

昭和30年11月20日、兵庫生物学会の催にて高校生、中学生、小学生、植物愛好の一般人等、色とりどりの参加者50余名は、室井先生、川崎先生他諸先生方引率のもとに、曾根駅9時半集合、本年春全国郷土の花選定にあたり、兵庫県花に選ばれたノジギク、また天然記念物に指定されたコバノチヨウセンエノキの見学をかねての、曾根、大塩附近の植物採集に出かけた。晩秋にしては珍しく暖い上々の天気、一同先ずそれを大きな喜びとして、目的地に向う。

先ず曾根駅から程遠からぬ曾根神社に参拝する。境内の高砂の老翁老嫗で名高い夫婦松は、残念ながら既に枯れ果て、秋草乱る中に、わずかに残された一本の根つこに却つて哀れを催す。囲いの内側の草原のあちこちに、昔の松の子だという千本松が、何れも1メートル位に伸びている。他に、野の草を圧して、メリケンカルカヤの群生するのが見られる。そぞろに新旧の感うた。2、3株採集する。大歳神社の方へ足を廻らしたとたん、其の石垣を取巻いてコスミソの叢生あり、掌にのせて始めて目に入る程の極小さい、5ミル位であろうか、洵に可れんな濃い紫の花に心ひかれて、5、6株採集する。曾根神社から東へ向うこの附近には、メリケンカルカヤ、珍しくムラサキネズミノオ等もあり、ヒトモトスキヤコンギク、またうら枯れてゆく草々が、秋陽をうけて、郷愁に似た懐かしい香を放つ。

今日見学第一の目的コバノチヨウセンエノキは、曾根区松原町曾根神社境内東端、此の地の産土の神を祀る大歳神社社殿の東側にある。(尚此処に、御参考迄に先般発行の兵庫生物誌にのせられた、森為三先生御執筆の、コバノチヨウセンエノキについての記事をそのまま記させて頂きます)

“主幹の太さ 根元から1.5m 高の廻り 2.27m  
樹高 6.89m 主幹は高さ 2.27m 東方と  
北方に二大枝を出している。  
枝張り 北方へ 10.5m 東化へ 7.3m 南方へ 6  
m強 西方へ 5.75m

コバノチヨウセンエノキは、エノキと異り葉の上  
面は稍粗浚で硬い伏毛あり、下面は淡白色を帯  
ぶ。

コバノチヨウセンエノキをかこんで、記念撮影する  
人、研究する人多々。附近にてイヌビワ、オノエヤナ  
ギ、エノキ等を採集する。此処から再び曾根神社本殿

の方へ戻る。草の香にむせび、晩秋の野を飾る穂芒の  
波の美しさに、すっかり眸を奪はれながらゆく野路の  
あちこちに、白く優しいノジギクを散見する。此の附  
近のものに重弁のもの多し。

黄緑、代赭色の葉をつけた美しい小灌木にかこまれ  
た小高い宝殿の山々は、白い花の衣をまとつた様だ。  
指葉に、活花に、また庭に移し植える為にと、一同喜  
々として、あちらの丘に、こちらの山すそにと散る。  
皆の口をついて出る言葉は、ただ“きれいですねえ”の  
歓声ばかり。山すその一才小高い所で、“チャンテン  
ですよ”の室井先生の御指導の声、“これがツルドク  
ダミですよ”の川崎先生のお指図に、皆熱心に耳を傾  
け採集する。同じ場所に左巻き、右巻きのものあつ  
たことは、俸せな収穫であつた。この附近より宝殿の  
丘の上まで、段々畑の石垣を埋めて幾巻きもの白花ノ  
ジギクの群落あり。山の中腹あたりで、黄花の一群を  
見つける。後で氣のついたことだが、こんなに沢山の  
ノジギク群落の丘に黄花のものはその一叢であつた。

頂上に登りついてから、今度は反対側の大塩方面に  
向つて、丘をぐるぐる廻りながら下りる。其間にも美  
しく紅葉した樹々の葉つばを採集する人、淡い梨色、  
また冴えた藍色のヤマブドウの実だの、サンキライの  
真赫なつぶら実に眸を奪れては採集する人等々。たち  
まちに一同の掌の中はノジギクと山草で美しく彩られ  
る。飄々と風に靡く草々の中に、大きなノジギクの群  
落は、どこまでもどこまでもつづく。

室井先生の御案内にて、大塩側の山の中腹にある、  
とある空家にて昼食をしたためる。やえむぐらしけれ  
る宿の——と申したい人住まぬ一軒家を、無断借用に  
及んだまではよかつたが、ヤブシラミ、イノコヅチな  
どが、皆のオーバーに、ズボンに、スカートに、鬼に  
角一仕事程はつき、一同苦笑一しきり。

川崎先生の御好意によるお持たせのソテツの実の炒  
つたものに、七十五日の命をのぼし——山中で疲れき  
つた旅人が、マタタビを食べて元氣をとり戻し、又旅  
をつづけた——それでマタタビと言うのですよ、と  
のお講義つきのマタタビの美味しい塩漬を頂戴に及ん  
で、いよいよ元氣快復、それに加えて、渋谷先生自家  
製の特級ブドウ酒の御芳情にあづかり、舌鼓を打つな  
ど、今日は計二百二十五日の長生きを約束され、大い  
なる感謝のうちに塩田に向う。其のあばら家の裏の方  
にノジギクの大群落あり、腕に自信のある方々のカメ

ラに納まる。ノジギクをバツクにして黒木鶴足氏による記念撮影あり。山を下り切つて、電鉄の線路を南へ越え、もう海浜らしく、風も磯の香を運び、白ぼつちの砂の道になる。さくさくした砂地の両側の草叢には、はやハマエンドウが、7、8センチの丈に健康に伸び、浜風にゆれている。

この辺りから素晴らしいクコの群落がつづき一同歓声をあげて走りより採集する。たちまち一同の手の中はクコの赫い実で目も覚めるばかり。海辺までの道々で目につくのは、ただクコの赫い実とノジギクの白い花だ。ハマボウキ、アイアシ等採集する。

海岸の石ころの窪地で、室井先生司会の座談会が催れる。先ず一番始めに、大浦先生の“この辺の海浜植物について”と題してお話し、三木先生のスマレについての御研究を伺い、その後、川崎先生の、今日の採集植物、エノキ、コバノチヨウセンエノキ、ノジギク、クコ、イヌビワ、シヤミセンズル、等々についての御講義、また御趣味の、クコ酒、キク酒の製法及び御利やくについての御高説を拜聴する。渋谷先生のシヤガイモの発芽を止める新発見、リンゴを同居させるお話しや、植物の左巻き、右巻きのお話の後、佐藤先生のノジギクの分布状況図によつての御説明あり。また安木先生、この辺りの池のヒカリモについてのお話しを伺う。古川先生の、人間にも触れて、貝の左巻き、右巻のお話し、クチベニ貝、ハリママイマイの一寸他ではきけぬお講義あり。終りに、室井先生“私のお話しは漫画のお講義ですよ”との前置きで、今日はノジギクの見学でしたから、それに因んで“菊の文字について”と変つたお講義あり、人を煙に巻く、菊の学問略語、リフノシイの伝授あり。また見学の途中、水のひいた川で見たカニのお話し——皆の足音でカニが我勝ちにあたりの穴に逃げ込んだが、その逃げ込み方について——何事か起こつて、カニが穴に逃げ込む時は、丁度自分の体にあつた穴には入る習性、

それと同じ事が人間にも——特に子供によく見られる——と仰有つて、一同お笑はせになる。1時間あまり、他の集会などでは味えぬ、諸先生方の有益なお講義、また楽しい、面白いお話しに加えて、一同が和やかな気分浸つたことは望外のよきこびであつた。

曾根駅へと帰る道々も、塩田を見学しつつ、シチメンソウ、ハマボウキ、ハマアカザ、ウラギク、ハマサジ等採集する。横切つてゆく塩田外側の溝端や、崖の草叢は、ススキに交つて、クコとノジギクがこぼれるばかり、全く嘆息が出る程だ。この辺りの2、3か処に黄花ノジギクの群落あり、白花、黄花、両方を庭に移し植えて勉強したく採集する。道々限に入る塩田工場の煙突は、レンガで作られているが、塩の為に腐蝕するらしく、塩風の吹きつける面のレンガはひどい減り様だ。塩田を取巻く溝の中に、青海苔を散見する。

15時、一同楽しい1日の植物採集行を了え、帰路につく。背中のリュツクはふくれ、胴乱も一坏だ。手にも、持てるだけ持ったノジギクの白と黄の花が、優しい高い香りを漂はせ、こぼれる様についたクコの真赫な実が、胸のあたりでゆれる。

ひめすみれこき紫のその小さきいのちにふれぬ  
深秋の旅

土手の上草むら埋めてのじぎくは山を抱きて静かにもゆ

ひようひようと風に吹かるすすき野のこの  
赫き実魅入られて佇つ

曾根の丘宝殿の山なだれゐて暮れむとしつつ冬の  
彩雲

咲きのこるうらぎく愛し紫のあせなむ日にもた  
たにやさしく

掌にいつぱいののじぎく白しくこ赫し病む友に  
よせむこれの慰め

昭和30年11月20日

## 第11回総会案内

去る10回総会で明32年度の総会は姫路市市立姫路高校で行なわれることに決定しました。

詳細は後日案内状を発送するが、5月中旬に同校で会場が持たれる。

研究発表御希望の方は姫路市八代深田、市立姫路高校、森本義信先生あてに3月末日までに御申込み下さい。